第３０回「ハートミーティング」意見交換の内容について

東日本大震災支援活動に従事した消防局職員

★参加メンバーからの主な声

○　緊急消防援助隊の活動は，基本的に７２時間の活動を想定して計画されているが，今回は，被害が甚大であり派遣先も遠方であったことから，１箇月を超えての過去最大規模での長期派遣となった。

○　震災対応では，まず部隊が迅速，安全に現地に入る必要があるため，車両への給油のタイミング調整や道路公団の許可を得た開通前の道路使用などの工夫を行った。その結果，非常に速い時期に到着することができ，後日，現地の方から「心強かった」との言葉もいただいた。

○　一人でも多くの命を救いたい一心で活動に志願した。これまで経験のないほどの被害の甚大さ，津波の恐ろしさを目の当たりにした。

○　慣れない放射線対策，通信の途絶など通常ではありえない状況下での活動であったが，自分たちが苦労しているという感覚はなく，むしろ通常どおり早く病院へ運ぶことができれば助かる命が，遠距離の搬送で時間がかかり，救えなくなるのでは，との不安があった。

○　「救援隊の皆様おつかれさまです」との張り紙を見たり，消防車にあいさつをしてくださる方，直接「ありがとう」といってくださる方にたくさんお会いした。とても感動し，消防士になってよかったと心から思った。

★市長からのコメント

○　震災翌日の新聞朝刊には,「京都市の消防隊がいち早く現地に向かう」との記事があった。こうした迅速な対応は，皆さんの普段からの準備，訓練の成果であり，敬意を表する。

○　また，市の対策本部等で現地の活動をバックアップした職員も，京都府との連携や現地の声をしっかりと収集し，適切に支援をしていただいたことに感謝している。

○　市域での防災対応に当たっては，みんなが災害等に対する危機感を共有して，具体的な行動につなげていくことが大切である。地域を把握する区役所と消防が一層協力し合う仕組みづくりも有効である。

○　皆さんは，今回の活動を通じて多くのことを学んだ。そのことを「これからの消防を担う職員の採用や研修をどのように行っていくか。」「専門性や技術，チームワークをどのように高めていくか。」など，今後に活かしてほしい。